

太平洋北部広域型増殖場造成事業調査

山 中 崇 裕 ・ 松 宮 隆 志

調 査 目 的

太平洋北部地区にヤリイカ (*Loligo bleekeri* Keferstein) を対象とした産卵礁漁場を造成するにあたり、設置場所及び産卵礁の構造の検討と設置後の資源管理を行うための基礎資料を得ることを目的として、生物的条件調査を行った。

調 査 項 目

1. 試験産卵箱による産卵水深調査
2. 尻労漁協におけるヤリイカ月別漁獲状況調査
3. ヤリイカの検体測定
4. ヤリイカの標識放流
5. 東通村尻労地区における情報収集

調 査 方 法

1. 試験産卵箱による産卵水深調査

1995年12月19日に、下北郡東通村尻労地先(図1)において、水深30、35、45mの海域に鉄製網掛の試験産卵箱(図2)を5個ずつ延縄式でアンカー固定し、浮玉をつけて設置した。1～7月まで概ね月1回、試験産卵箱を引き上げ卵囊の付着状況を観察した。卵囊の付着が確認された3月にはアレックス社製電子水温・水深計(共にデータロガー式)を用いて産卵箱設置海域の水深及び底層水温を測定した。

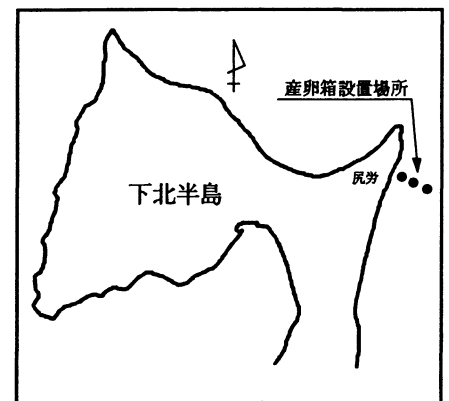


図1 試験産卵箱設置

2. 尻労漁協におけるヤリイカ月別漁獲状況調査

1993年11月から1996年8月までの尻労漁協のヤリイカ月別漁獲量を調査した。

3. ヤリイカの検体測定

小型定置網によって漁獲され、尻労漁協に水揚げされたヤリイカを無作為に抽出し、外套長及び

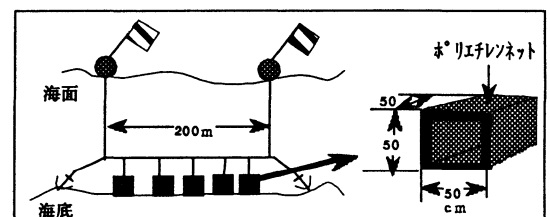


図2 ヤリイカ試験産卵箱の概要

成熟度等を測定した。1995年10月4日には86個体、1996年5月24日には74個体を購入し、合計160個体を測定した。

4. ヤリイカの標識放流

東通村尻労地先の底建網に入網したヤリイカを、1995年12月18日に82尾、1996年1月23日に32尾、1997年1月28日に120尾アンカータグを装着し放流した。1995年12月8日に泊～尻労沖水深100mで昼釣りで漁獲されたヤリイカ208尾にアンカータグを装着し放流した。

5. 現地における情報収集

試験産卵箱調査時に、東通村尻労において、ヤリイカを漁獲している漁業者から、漁獲時期や産卵時期並びに季節による魚群の移動状況等に関する情報収集を行った。

結果及び考察

1. 試験産卵箱による産卵水深調査

1995年12月19日に東通村尻労沖合の水深30、35及び45m地点に設置した試験産卵箱の観察は1996年1月23日、3月6日、4月22日、5月24日、7月3日の計5回であったが、卵囊の付着が確認されたのは1996年3月6日の水深45m地点の試験産卵箱のうち1箱のみであった。

卵囊の付着本数は40本で、全て一方の側面に付着していた。付着していた卵囊の総重量は99.1gで、卵囊1本の平均重量は2.48gとなる。付着していた卵囊からランダムに6本選び卵数を計数したところ、1本当たりの平均卵数は31.3個であった。卵は全て未発眼状態で、白濁したものは認められなかった。

このとき的水深及び底層水温は、沖側の施設から順に、水深44m水温3.0℃、水深35m水温2.3℃、水深30m、水温4.4℃であった。

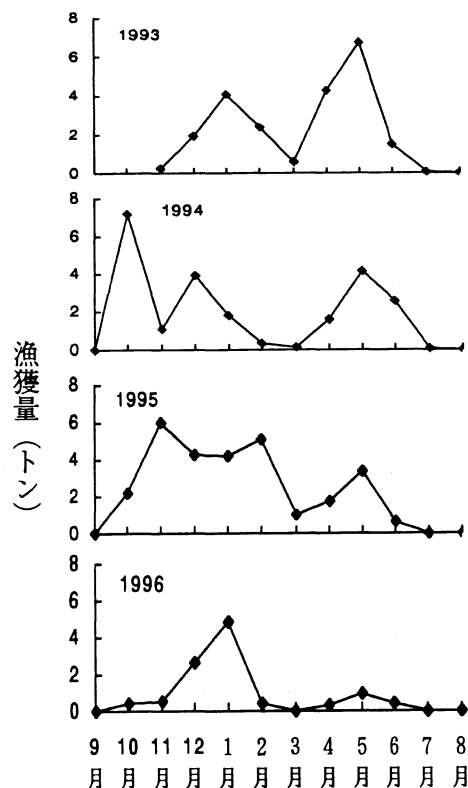


図3 月別ヤリイカ漁獲量

2. 尻労漁協におけるヤリイカ月別漁獲状況調査

1993年11月から1996年8月までの、尻労漁協における月別のヤリイカ漁獲状況は図3のとおりで、冬季（10月～2月）、春季（4月～6月）ともに漁獲されている。冬季は1993年は10月、1994年は11月に最も漁獲が多く、年によりその時期が違う。春季はいずれの年も5月に最も漁獲が多い。1993年から1996年までの春季の漁獲量を比較してみると、年を追うごとに漁獲量が減少していることがうかがわれる。冬季の漁獲量については春季のような傾向は見られないものの、1996年の漁獲量が少ない点では一致している。

3. ヤリイカの検体測定

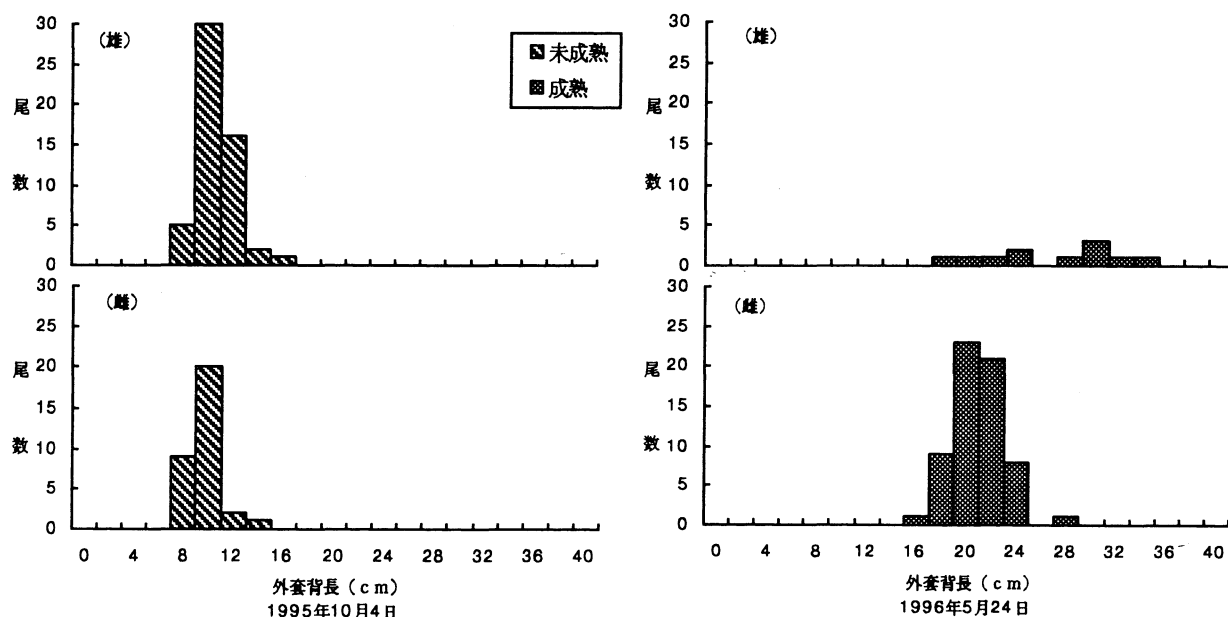


図4 東通村尻労地先の小型定置漁業で漁獲されたヤリイカの外套長組成と成熟割合

東通村尻労地先で漁獲されたヤリイカの外套長組成と成熟割合について図4に示した。1995年10月4日の検体は雄が54個体（63%）、雌が32個体（37%）で雄雌ともに全ての個体が未成熟であった。1996年5月24日の検体は雄が11個体（15%）、雌が63個体（85%）で、雄雌ともに全ての個体が成熟していた。

4. ヤリイカの標識放流

東通村尻労地先の底建網に入網したヤリイカを、1995年12月18日に82尾、1996年1月23日に32尾、1997年1月28日に120尾アンカータグを装着し放流した。1997年3月31日現在再捕報告はない。1995年12月8日に泊～尻労沖水深100mで昼釣りのヤリイカ208尾にアンカータグを装着し放流したところ、表1のとおり再捕報告があった。

この再捕結果は、冬に放流されたものは津軽海峡を西進するという過去の知見と良く一致している。

表1 ヤリイカ標識放流再捕結果

再捕月日	再捕場所	再捕漁具
1996年1月16日	平館村弥蔵釜沖	小型定置網
1996年1月18日	大間町下手浜沖 1.2マイル	不明
1996年2月21日	松前郡松前町字館浜	定置網

5. 東通村尻労地区における情報収集

東通村尻労地区において、調査時に同行した漁業者から情報収集した結果、以下の知見が得られ、各調査の実施にあたり参考とした。

① 漁獲時期 10月～2月、4月～6月

② 漁法 大型定置網、小型定置網、底建網及び釣り

③ 産卵状況

1) 1996年1月22日聞き取り

- ・近頃、水深50～60mの海域に設置した底建網にすこしずつ卵囊が付着するようになった。ピークはこれからと思われる。
- ・水深30～60mの海域で操業しているタコ箱には今でも既に相当数の卵囊が付着している。

2) 1996年3月6日聞き取り

- ・産卵箱調査海域周辺のアイナメ籠や、水深50～60mの海域に設置した底建網にはヤリイカの卵囊が相当量付着している。

④ その他

- ・尻労沖でも毎年4～6月にはヤリイカの春漁がある。昭和50年代には小泊村の漁法をまねて敷き網漁業を行ったこともある。春イカは、水深10m以浅のコウナゴ棒受網でも混獲されるほど浅い海域にまで回遊する。